

第3回国際シンポジウムにむけて

場の記憶・からだの記憶 非文字資料研究の新地平

OSATO Hiroaki
大里 浩秋

KITSUKAWA Toshitada
橘川 俊忠

SANO Kenji
佐野 賢治

NAKAMURA Hiroko
中村 ひろ子

NISHI Kazuo
西 和夫

HIROTA Ritsuko
廣田 律子

MAEDA Yoshihiko
前田 禎彦

YAMAGUCHI Kenji
山口 建治
(司会)

An Invitation to The Third International Symposium of Our Program Memories Inscribed in Places and the Body : New Horizons in the Study of Nonwritten Cultural Materials



山口 「第3回目の国際シンポジウムが来年の2月23、24日の両日開かれます。その準備に当たっていただいている方々に、今日はお集まりいただき、最終年度に開かれるこのシンポジウムのねらいなどを自由にお話しいただき、気運を大いに盛り上げていければと考えています。

テーマは「非文字資料研究の新地平」、副題は「場の記憶・からだの記憶」となっています。実施委員会の内部でこのテーマを決めるまで、だいぶ時間がかかったわけですが、最終年度のシンポジウムということで、これまでの研究成果をまとめるだけでなく、その研究成果を発信する、「発信」ということを重要なテーマにしてください、ということが拠点リーダーの福田先生から要請されていました。

また、今まで各パートで行われていた研究成果をまとめ統合する、ということもコンセプトにすべきという意見が出されました。体系化が難しいとしても、この統合と発信ということ、十分に織り込んだ内容にしようという話になり、いろいろ議論した結果、最終的には、「場の記憶・からだの記憶」という内容でやることになりました。

身体技法はCOEの一つの大きなテーマですが、身体技法、つまり人間の身体の中に記憶、蓄積されている様々な文化と、身体の外といいますか、空間的な広がりや場所や地域、景観に刻印された人間の活動の記憶、大きく分けるとすればそういうことではないかと「場の記憶・からだの記憶」という副題をつけたわけです。

しかも3回目の最終年度のシンポジウムということで、この5年間のCOEの総括の意味合いをこめて、最終日にはかなり長時間の総合討論の時間も設けてあります。そ

の総合討論については、佐野先生と橘川先生に司会をお願いしており、今日の座談会にもご参加いただいております。また初日の司会者の西先生にもおいでいただいております。

それでは最初に、各セッションの責任者の方に、シンポジウムの内容はこんなことを考えている、ということをそれぞれお話ししていただければと思いますが、まずはセッション1のマルチ言語版絵引編纂の前田先生から、今回のシンポジウムについての抱負などお話しいただければと思います。



前田 1班では「図像資料の体系化と情報発信」をテーマに活動していますが、その前提となっているのが、COEの母体である日本常民文化研究所が、今から40年あまり前に編纂した『絵巻物による日本常民生活絵引』(以下、『生活絵引』)です。1班では、その成果というものを継承して、日本の近世、中国、韓国それぞれの図像を取り上げて、まったく新しい「絵引」をつくるという作業を行っているわけです。その一方で、マルチ言語版『生活絵引』の作成にも取り組んでいます。これは、全5巻ある『生活絵引』のうち、当初は3巻の予定だったのですが、結局作業の困難さから2巻になってしまいましたけど、第1巻と第2巻について、英語・日本語・中国語・韓国語の4カ国語によるマルチ言語版『生活絵引』を作成するという仕事です。『生活絵引』の各項目は、中世の絵巻から抜き出した図と、それに付けたキャプション・解説から成り立っているのですが、その全体を英訳した「本文編」と、キャプションの語彙を英語・日本語・中国語・韓国語の4カ国語で表現した語彙対照表を中心とする「語彙編」と



をセットにして作成しています。現在、ようやく第2巻の本文編・語彙編を発行し終え、第1巻の本文編・語彙編の発行に取りかかっているところです。このように、1班の仕事は『生活絵引』という貴重な過去からの遺産をもとに、翻訳を通して「絵引」という方法を世界に紹介・発信するという意味をもつマルチ言語版の作成と、「絵引」という方法の価値と可能性を明らかにするため、それを日本近世、中国、韓国の図像に応用して新しい「絵引」を作り出すという二つの側面をもっているのだと思います。これまで2回のシンポジウムでは、このうち後者、つまり新しい「絵引」の作成をめぐるセッションが積み重ねられてきましたので、今回は、ようやく完成したマルチ言語版を素材に、我々の仕事の原点ともいえる『生活絵引』本体の価値であるとか、あるいは翻訳という作業を進めていくうちに明らかになってきた問題点などを取り上げて報告し、考えてみるというのが、ここでのセッションの内容ということになります。

山口 どうもありがとうございました。抱負はいかがですか。

前田 セッションの目的の一つは、せっかく苦労して作ったものですから、とりあえずは完成したマルチ言語版の内容、つまり出来映えとか完成度とかを検証してもらいたいと思います。いろいろ問題だらけであることは私もよく承知はしているのですが、そういった問題点について客観的で建設的なご意見を賜りたいという気持ちがあります。もう一つは、日本語や日本文化に関する知識があまりないため、これまで『生活絵引』に触れることのなかった外国の方々が、このマルチ言語版を手にして、そこからどのような関心と可能性を汲み取ることができるのかということにも大いに興味をもっています。1班の仕事は、「絵引」という方法を世界に発信するという意味をもっているわけですから、やや大げさに言えば、世界の図像に対する応用の可能性なども探していきたい、というのが抱負・希望ということになるのではないかと思います。

山口 ありがとうございました。では、セッション2の大里先生お願いします。



大里 セッション2のテーマは「租界、神社の遺跡から過去の実態を読み解く試み」というものです。私たちのグループは、「環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解読」を目指していますが、そのうちの災害の痕跡につい

ては、具体的には江戸の大火や関東大震災を取り上げて、2年前の第1回シンポジウムで報告を行いましたし、独自のシンポジウムも開いていますので、今回は中国の旧日本租界について調べているメンバーと、海外神社のことを調べているメンバー、さらに朝鮮における倭城のことを調べているメンバーが報告することになりました。

租界については、主に上海と、租界ではないのですが、それに近い特権を日本人が持っていた青島の事例を挙げて、日本人が経営する紡績工場に働く日本人職員の宿舍と中国人労働者の宿舍の現況調査、およびそれらを建設した当時の図面等を比較しながら、建物に込めた日本人の意図やその後の建物の変遷から読みとれるものは何かを明らかにしようというものです。他に、漢口の日本租界について、そこに住んだ日本人が保存していた資料を使って、当時の状況を再現し分析することを目指した報告もあります。

それから神社です。日本人が渡った先には神社ありで、海外の色々な地域に神社を建てたのですが、その中で今回は、旧満洲（中国の東北地方）に残っている神社やその痕跡を取り出し、それらの建物がどんな意図で造られ、どんな特徴を持っているのかを明らかにします。もう一つ、豊臣秀吉軍が朝鮮に出兵した際にその出城として建てた倭城の遺跡を調査して、それと大阪城に代表される近世の城郭とを比較することで、両者の違いから読みとれるものは何かを主眼にした報告もあります。

こうした内容の報告は、従来の研究ですと、文字資料を主とし現地調査や図面を従として利用するものがほとんどだったと思うのですが、今回は非文字資料研究を念頭に置いて報告する予定ですので、注目してください。

山口 では、セッション3の佐野先生。



佐野 今回のシンポジウムの目的、5年間の成果をどのように公開・発信していくかについて、地域統合情報発信班は、「インターネット・エコミュージアムの可能性」をメインテーマ、サブタイトルを「地域研究と情報学の連携」としてセッション3で発表します。まず、図像、景観、身体

技法の質の高い大量のデータを有する福島県南会津郡只見町の非文字資料群をコンテンツ化したものをウェブ上の事例で披露します。共同でシステム開発にあたった岡山のコンテンツ(株)の小野博さんに解説を頼みました。只見町を選んだ理由は、地域住民の協力はもとより、15年間に及ぶ町史編纂事業が終了し、各種文書・民具・写



真をはじめとした映像資料から地質、動植物などの自然誌資料までが網羅的に記録化・整理され、それらのおおよその関係性・体系性が全16巻の町史本編・文化財調査報告書を参照することにより見通せるからです。さまざまな地域情報をクロスさせることにより只見という山村の構造性を浮かび上がらせる手法について、例えば田植えで実際に使われる民具を近世農書の記載・絵図と対照し、早乙女踊の田植えの所作と実際の農作業の姿勢をモーションキャプチャで提示、画像、景観、身体技法を統合的にクロスさせるなど、第1発表者の佐野がいくつかの事例を紹介した後、只見町の住民自らが整理した約8000点の民具のデータベースを地域情報と結合させ、どのようなことが言えるのか、情報工学の立場から第2発表者、神奈川大学の木下宏揚先生が報告します。

只見町の地域性をインターネット上で博物館化する試みに対して、続く第3、第4の発表は、千葉県市川市で地域の文化資産を活用したオープンミュージアム、情報発信型教育の構築を試みている千葉商科大学の朽木量先生、ベトナム・ハノイの都市形成史を中心に時空間情報の検索・可視化に関する方式研究を進めている、京都大学の柴山守先生のお二人がそれぞれの立場から事例を報告し、地域情報をインターネット上で統合的に発信するシステムとその有効性についての問題点を指摘します。

コメンテーターとして、中国の文化生態村の運営にかかわっている尹紹亭先生、韓国の民俗村・民俗文化財の実態に詳しい任章赫先生のお二人が、発表に対するコメントに加え、実際のエコミュージアムの活動に照らして、インターネット・エコミュージアムの可能性と問題点を指摘します。エコミュージアムの先進国、フランスからの意見も求めたかったのですが、候補者の都合がつかず今回は断念しました。以上簡単にセッション3のシンポジウムでの構成、内容案を紹介しました。現在、コンテンツ作成の最終段階で、当日作品をどのような形で提示するのかを示せず、具体的イメージがわかかなかったかもしれません。今後の抱負については、後で話します。

山口 それでは、セッション4の廣田先生、お願いします。



廣田 セッション4は「身体技法および感性の資料化と体系化」というテーマです。このテーマは、2班の当初のテーマと一致します。川田順造先生の「身体技法および感性の体系的資料化へ向けて」、廣田律子と海賀孝明さんの「モーションキャプチャ技術と身体技法」、3番目が渡部信一

先生の「民俗芸能の『わざ』はデジタルで伝わるのか？」の3構成になっています。シンポジウムのテーマ「身体技法および感性の資料化と体系化」は、すでに、川田先生が1971年に『無文字社会の歴史』を発表して以来、一貫して研究してきたテーマです。COEのプロジェクトで5年にわたって調査をしてきたデータを更に加えて、あらためて「身体技法および感性の資料化と体系化」をテーマに発表するという事です。COEで川田先生が現地調査を行ったのが、メキシコとモンゴルで、運搬であるとか座法であるとか、それまでの日本、フランス、西アフリカで得たデータと合わせて、モンゴロイドの身体技法のより広い、深い視野の比較検討が進んでいますので、その成果を発表できると思います。感性というのは難しいテーマですけれど、川田先生がフランスで調査を行い、調査の問題をほかの五感との関わりで研究を深めており、感性の問題についても発表が及ぶと思います。この大きなテーマが形になって、明らかになっていくであろうと思います。

テーマに一貫性を持たせるには、「身体技法および感性の資料化と体系化」と「身体技法と感性」の接点をどこに持っていかかということが大切ですが、身体技法の研究作業として芸能の身体技法を、モーションキャプチャによってデータ化、定量化を進めることで、具体的に取組んでできました。これは、2番目の廣田と海賀さんの発表につながりますけれども、今までデータ化できた中国の儼戯のデータ、観世流能楽師の関根祥人氏のデータ、それから花祭りの演者の伊藤勝文氏のデータを収録しています。編集作業の後、数値データ、グラフデータ、キャラクター画像を利用しながら、データの解析作業を進めています。その解析結果が随分とあがってきていますので、それを今回発表していきたいと思っています。

能楽のように洗練された芸能と民間の芸能との共通点や相違点、民族間での共通点や相違点をデータ化して比較するわけですが、いろいろな切り口で比較するために手間のかかる編集解析作業を、文系と理系の力をあわせて行い、結果を出そうとしているところです。注目していいと思うことは、因子分析という統計学の手法を使って、モーションキャプチャのデータを解析しているところです。例えば、能の演目間の類似度を数値化することで舞いの性格がわかります。中国の儼戯、日本の花祭り、日本の能、3種の舞踊間の類似度を数値化することによって、系統図ができるのです。かなり面白い結果が期待でき、身体技法が資料化を経て体系化する成果を表せるの



ではないかと思っています。

もちろん、感性とつながった部分では、例えば回転とかジャンプの動きのデジタルデータから、天に近づこう神と一体化しようとする人間の感性を浮かび上がらせていけそうだということです。ただこれは検証が必要なので、渡部先生は、一体民俗芸能の技はデジタル化で本当に伝わるのかどうか、私たちの取り組みの可能性を検証してくれると思います。当初大風呂敷を広げてテーマを設定し、私たちが収録解析を進めてきたデータが、意図を持って資料化され、体系化される方向性は見つかったのですが、それが正しいかどうか確認しなければならぬと考えるので、このような構成となりました。

山口 では、また後で補足してもらいたいと思います。セッション5の中村先生お願いします。



中村 私たちは「身体技法を展示する」としてセッションをもちます。実験展示班は理論総括班同様最後に編成された班ですので、統合発信のための班といえるかと思います。もう一つの課題

「高度専門職学芸員養成プログラムの提示」も同時に進めておりますが、今回のシンポジウムは発信を中心テーマにということですので、二つの課題のうちの展示をセッションの課題としました。

展示につきましては前号のニューズレターのインタビューにも答えておりますように、各班が成果をまとめつつある11月という時期に、その成果を統合して発信することは困難ですので、展示の課題を「非文字資料のもつ豊かな世界を展示を通してメッセージする」ということにおきかえて、「あるく 身体の記憶」を展示テーマとして設定しました。

非文字資料である画像・映像から私たちの「あるく」という身体技法を探り出し、それを伝えるという試みです。展示は研究者だけではなく多様な来館者にも伝わるのが求められます。そこで来館者が様々な歩き方を体験することで、それぞれの身体に受け継がれ記憶されている歩きに出会う、すなわち身体技法、ひいては非文字資料の存在に出会う、そんな装置を用意してみたいです。

従来展示という形で提示されることの少なかった、身体技法という非文字資料を展示を通して発信するという試みと同時に、展示あるいは体験ということを通して非文字資料研究にどのような新たな視点が獲得できるのか、その可能性と限界を探る実験になるかと思っておりますので、その試行錯誤を「展示をつくる」として報告します。

コメンテーターをお願いした民俗芸能の研究者である笹原亮二先生には、民俗芸能を通して身体技法の記憶と伝承、あるいはその記録と研究といった視点から「身体技法を展示する」ことの意義について、もうお一人の展示評価のご専門の村井良子さんには、実際に展示場で展示評価、来館者調査をしていただき、果たして来館者にメッセージは伝わったのかを検証していただきたいと思っております。

山口 どうもありがとうございました。ひととおりの話ししていただいたのですが、補足がありましたならば、つけ加えてくださっても結構です。最終日には、5年間のCOEの事業活動の総決算という意味で、議論をできればと思っています。この点についてはどうでしょうか。



西 今、お話した内容を、プロジェクトを実施している我々のために発信するのでなく、外からできるだけ大勢の方に来ていただいて、その方たちにも伝えたいです。

山口 今回のシンポジウムでは、COEの研究の成果を発信するということに重点を置いています。地域統合情報発信とか実験展示という形で統合がはかられ、特に4班、5班に期待がかかったわけですが。しかし、統合というのはあまりうまくいかなかった、まあ、非常に難しかったということですね。全体の総括ともかわるのですけれども、橘川先生どうでしょうか。5年間やって、どこがどううまくいって、どこがどううまくいっていなかったのか、最初から加わっていらっしやったので。



橘川 本来は、リーダーが...述べるんでしょけどね(笑)最後の総合討論の司会をやるということですが、今回のシンポジウムでは、これまでの5年間の活動の総括が求められると思っています。総合討論では、非文字資料とい

う言葉を掲げてやってきたので、非文字資料とは何かということを考えなくてはいけないのかなと思います。

ただ、非文字資料という概念を抽象的に定義してもしょうがないので、やり方としては、各班が対象としてきた非文字資料、たとえば画像、景観、身体技法を、どういう視角、方法によって分析・研究してきたか、ということをお話してもらったところから始めたい。そして、今までのそれぞれの専門分野の研究のあり方なり、方法なりが、非文字資料を研究対象に取り込んだことによって、どう変わったのか、どういう新しい問題が生まれてきた



のか、ということについて検討していきたい。

それともう一つは、非文字資料を研究するということがどういうことなのかを、文字資料を対象とした研究と比較し、人類文化の研究という文脈の中できちっと整理をしてみることも必要ではないか。文字資料というのは、ある意図をもって書かれたものですから、その書かれた意図を正確に把握するということが何よりも大切なことになります。他方、非文字資料の場合は、非文字資料として、表現者の特定の意図があるにしても、それとは別の意味を発見するという作業が要求される。文字資料の場合とちょっと違う。そういう意味では、非文字資料がもっている製作意図とは違う意味を発見するには、専門分野を異にする複数の研究者が一つの資料を様々な角度から検討するというような作業が必要ではなかったか。これは田島先生が、ニューズレターの前号で指摘していたことですが、例えば、画像資料をみたとき、歴史学、民俗学あるいは建築史をやっている人、民具をやっている人が、それぞれ違ったところから、さまざまな角度から検討して、一つの専門分野からでは見えなかったような情報を取り出すというようなことです。その結果、新しい研究分野が生まれるかどうか、新しい発想が出てきたかどうか、ということを確認したい。

たとえば、身体技法ということで「歩く」という動作をとりあげる場合、映像化されたもの、写真、画像などを資料として使う、あるいはモーションキャプチャのような新しい分析技法を取り入れる。そういうことから、「歩行学」とでもいべき新しい学問ができるかもしれないというようなことです。

もう一つ、総合討論の中でとりあげたいこととして、研究のための新しい手段としてのIT技術の問題があります。IT技術は、ある現象を記録化する手段、解析、分析のための手段として、どのような可能性を持っているのかということ。それから、蓄積した資料を、どういう風に検索をかけたか、解析したりするのか、各班が各テーマにしたがって資料化する手段としてどう使ったか、それだけではなくて、発信の方法の問題も含めて、その可能性をどう考えるべきか、という問題です。我々COEの最終的な研究成果は、印刷物、すなわち文字の形で出されるものが多く、非文字資料も文字で表記され、極めて矛盾している。全く別のコミュニケーションの仕方があるのかを、各班の研究を元に話を繋げることができたら、将来に向けた話になると思います。このようなことを今、漠然と考えています。実際、理論総括班はまだですが、

それぞれで行われたこと、個別化したことを、少し抽象化、普遍化して提示していただくと非常にありがたいと思っています。

山口 どうもありがとうございました。橘川先生のお話をうけて、皆さん、ご意見があればどなたかどうぞ。

大里 非文字資料研究とか学際的研究とか声高に言わなくても、これまでもそのことを意識して、個人であれグループであれ実行していた人はいたわけですよね。だけど、非文字資料にこだわって、神奈川大学で日頃顔を合わせたこともない色々な専門分野の人が集まり、大学以外の方々の協力も得て、ああでもないこうでもないとしんどい突き合わせを5年もやってきた。それは非常にいい経験をしたんだと、振り返って思います。

私のセッションの場合は、歴史畑の人と建築畑の人が一緒に現地調査を行ったのですが、同じ建物を眺めるのでも、建築専門の人の見方には、当然素人には思い至らぬ鋭いものがあって、ふだん現地調査重視を唱えている私にとっては、それをより充実させるためには、専門が違つう者同士の共同研究が是非とも必要であることをしばしば実感させられました。その意味で、今回の報告はそうした問題や関心をどこまで実践できたかを皆さんに判断して頂く機会となります。

山口 どうもありがとうございました。佐野先生も、総合討論の司会者になっています。いかがでしょうか。

佐野 研究成果の発信については、橘川先生が3点ほどにまとめてくれました。私は、やはり共同研究の進め方が一番の問題だと思います。日本では共同研究、特に人文科学方面はうまくいかない。共同研究である以上、それぞれの個別研究の単に総和ということではなく、その総和以上の成果を上げなければ、時間と費用をかけた共同研究の意味がない。5年間を振り返って反省すべき点は反省し、次の段階でプラスに変えていくことが大事だと思います。もともと地域統合情報発信班は、画像、民具、身体技法、景観の各班の研究成果を、只見という一地域の資料を統合して発信するシステムを開発するのが役割でした。

廣田先生のところは、文系と理系の連携をうまく行っているようですが、地域研究と情報工学を結びつけた形での情報発信をウェブ上で考えたわが班では、私のIT技術に対する能力不足もあり、著作権からサーバーの帯域の問題など解決すべき問題が、ソフト面ハード面、山のようにならなかつたので



が、その時間が取れないことも確かでした。情報工学との連携が十分にできなかったことが反省点の一つです。

それから、情報の統合の問題です。先ほどの橘川先生の意見にあわせ、共同研究のあり方を今一度、このシンポジウムで議論するのもよいのではないかと思います。COEプログラムの終了を、今後神奈川大学の共同研究を一步進めるための出発点にするためにも必要です。地域情報の統合でいえば、今回は全16巻の「只見町史」を検索の手がかりにしましたが、日本全国の市町村誌は膨大な数です。地方には行政資料から考古学発掘資料までさまざまな資料があります。それらをデジタル化し、データベース化して検索システムを開発していく糸口を今回は開いたと思います。単に学術資料というだけでなく、地域の人々にとっては、教育や観光資源として活用したり、北原先生の取り組んでいるような、災害情報として応用する道も開けます。インターネットの端末が、パソコンから携帯電話に広がっていることから、将来的にはさまざまな地域情報がその場で得られる可能性も無限に広がると思います。

山口 どうもありがとうございます。今までやっていた研究成果を取り込む、こういうところには、こういう進んだ研究があるというところに、多少たどり着いた、少なくとも、それをどう我々のやっていることに組み込めるかと…。

中村 今回のテーマは情報発信ということですが、漠然と「社会に向けて発信する」というのではなく、当然発信する情報によって対象と方法を選択しているわけですから、COEとしての発信に向けての指針ともいうべきものを整理しておく必要があるのではないのでしょうか。COEでは刊行、ウェブ上での公開、シンポジウム、そして4班のデジタルミュージアム、5班の展示とさまざまな形での発信をしようとしておりますが、それぞれの発信方法には違いがある。例えば私たちの展示は限られた空間で五感や感性を使い体験という形で参加もしていただく、対象も子どもから大人まで、研究者から学生や地域の人々までを含む、そして発信対象の人々とその場でコミュニケーションが成立する双方向型の発信ということで、他の発信とは異なる点も多い。すべてを情報発信といってひとまとめに議論するのではなく…と思います。

山口 お尋ねしたいんですが、情報発信という場合も、インターネットとかでやっている場合は、誰でもアクセ

スできるというのがメリットであり、対象は誰でもいいんじゃないですか。

西 誰でも、いつでも、どこでも。

山口 誰でもキーワードだけで簡単にアクセスできるというのが、インターネットのメリットですよ。

西 今までも、ひとつの分野では、その分野に対して発信してきたわけですね。専門誌に論文を書けば、非常に限られた範囲だけれども、論文を書くということで発信ができる。今回のこのテーマは、非常に幅が広い。だから非常に難しかった。非文字資料という言葉も、概念も、捉えるのが非常に難しい。5年間苦労してきた。その成果を、特定の範囲の発信ではなくて、誰が受け取ってくれるかもわからないような多くの人たちにも発信する。

佐野 各班が研究の中で開発したノウハウや研究の成果をどのように整合化し、統合して発信するかについて、議論する機会がなかったのは確かですね。それから情報発信ということでは、地域統合情報発信班では一方向の発信ではなく、たとえば民具作りの画面を見て、疑問点があったら製作者や学芸員などに問い合わせできるような、双方向的なシステム作りを意図しました。将来実現すれば、パソコンの小さな画が無限の広がりを持った博物館になるわけです。中村先生の実験展示班も、見学者に実際に歩いて体感してもらうとか、展示評価を重視するというので、一方向からの発信ではない形をとられています。

山口 どうもありがとうございました。時間がそろそろ迫ってまいりましたので、言い残したところがあれば、ぜひ、シンポジウムで発展した形で…。

橘川 最初にCOEに応募するときに提出した文書の中に、どのような社会的貢献ができるかという項目が入っていて、その時に、一応学術的なデータを社会の中で生かせるような形で発信すると書いているんですよ。それは、最初から発信ということが要求されていたということになると、従来の研究成果の出し方とは違うことを考えなければならなかった。そのことについて、我々が共通認識を持ってやってきたかということ、必ずしもそうではなかった。デジタル技術や情報発信のあり方は、従来の方法と全く変わっているわけだから、それについてどんな可能性が見えてきたか考えていくべきでしょう。それは今後の課題でしょうけれど。

山口 どうもありがとうございました。

(2007年10月19日 於神奈川大学1号館301号室 記録：大西 万知子)

*文章背景の画像は本学大学資料編纂室所蔵資料